産地ルポ

釣竿

■海を渡たる人吉の竹

釣竿の原竹である〝こさん竹〟は、九州だけの特産である。わけでも人吉地方は昔から豊富な竹材産地として有名である。釣竿で全国にその名を知られているのも当然であろう。

しかし、消費傾向が、一本竿からつぎ竿に変ってきたため、数年前から生産のウェイトは、女竹製のつぎ竿に移っている。一本竿はもっぱらアメリカ向け。三十七年の輸出総額は五五万本一、二〇〇万円となっている。

熊本産釣竿は、技術的には先進地に比べ、まだかなりの距離がある。一応中級品、いわゆる大衆消費がねらいであるが、規格、品質の均一性、不良品のなさで、高く評価されている。最近のグラスファイバーの進出で、高級釣竿が手痛い打撃をうけているのに比べ、中級品なるが故に影響はほとんどないという。だが、そのまま喜んではいられないものがあるようだ。

白玉粉

■最高の地の利、小川

「白玉粉」が、米どころ熊本ならではの特産品であることを知る人は意外と少ないのではあるまいか。原料が統制品の米であるため、戦時から戦後にかけての衰微は止むを得ないことであったが、二十六年、組合結成以来、良質の熊本白玉粉は、北九州市場から阪神にかけて急速に伸びて行った。

粘りが強く、白色に仕上るのは良質の肥後米を原料とするため。又、水質が晒しに最も適しているといわれる。市場獲得に成功した原因に、組合の結束もあげられる。融資、宣伝、包装を共同で行ない、物産館のあっせんによる場合、出荷も共同とした。殊に、北九州大企業に販路を得た事は大きな収穫であったと組合役員の弁。

今後は、単に問屋、販売店の取引だけでなく、直接消費層へのPRにより、需要を増大することが必要であろう。流通面での競争は、これからなのである。

球磨焼酎

■業界初のケース〝協業化〟

池袋Sデパートでは、十一月一日から、球磨焼酎の宣伝即売中であった。大阪でも同時に開催との事。東京では、三十八年四月からはじめて、今度で四回目の催しであるが、なかなかの好評である。

三十七年十月商政課の企業診断を契機として、販路を県外に求め、球磨焼酎業者二十七社協同の上、銘柄も「球磨焼酎」と一本化し東京市場に着々と根をおろしはじめている。東京に始めて進出したのが、梅酒のシーズンと合致してまずラッキーなスタートとなり、次第に常連もつき出した。即売会場では一日四十本程度の売上げであるが、消費層への侵透には、三年かかるといわれる。根気よい地道なPRが必要であろう。

緑茶

■〝期待がいっぱい〟の熊本茶

茶の生産地は、ほとんど県下各地に散らばっているが、上益城の矢部一帯の釜炒製、球磨郡全域と鹿北村の蒸製玉緑茶および水俣市の伸茶が代表的な熊本の茶である。

一、四〇〇ヘクタール、一、二四〇トンの生産量で、うち二五％程度が県外向けであるが、出荷体制が不充分で、まだまだの感。又、全国的に需要が高いのは伸茶で、熊本で作られているのが、大部分玉緑茶であることも問題がありそうである。昭和四十年には二、八〇〇トンの生産、うち一、五〇〇トンを出荷したいと、反当収益の増加、生産、販売の組織作りに懸命である。

肥後表

■系統出荷で更に大飛躍

〝肥後表〟として今や全国的になった熊本のい表は、丸い表と、七島表の二種類があるが、丸いは、ほとんど八代郡市が主産地、ほかに下益城郡、山鹿市など。七島いは、飽託郡およびその周辺で生産されている。丸い、七島いともに四〇〇年以上の伝統を持ち、恵まれた気候条件、栽培技術の近代化と、安くて質のよい肥後表を生み出す条件は揃っている。

ここ数年、作付面積、生産量とも着実に伸びており、全国第二位の生産量。昭和三十八年は、二、五一〇ha、二万二千トンの生産が見込まれている。熊本の場合、表の製造は、九割までが栽培農家が加工しており、広島のように専業者の手によっていない。この自家加工が、安い肥後表を生んでいるのではあるが、一方、規格の不統一あるいは品質に個人差を生じている処でもある。また、共販率も三割とまだ低い。

産量の八五％を県外に出荷し、安くて良質と定評のある肥後表である。計画的生産。販売、出荷体系の改善によっては、さらに鮮やかな脚光を浴びるのではあるまいか。

（Y）

資料

工場誘致の条件

★工業用水・電力・労働力・資源について

新産都市指定によって、県では今後、優先的な公共投資が行なわれるが、進出企業に対しては工場建設用地や資金のあっ旋その他いろいろの優遇措置が講ぜられることになる。すでに本県における工業開発構想、立地条件などについて正確に実現性のある計画がたてられているがその一端をここに紹介してみることにしよう。

工業用水

先進工業地帯における工業用水の不足は誠に深刻なものとなっているとき、本県には、日本三急流の一つとして知られている球磨川を始めとし、加勢川、菊池川など余裕水量を有する河川が残されている、また地下水も豊富で、県北では大牟田市の上水道源ともなり、八代平野はもとより、熊本平野も豊富である。

■球磨川　球磨下りとして観光的に知られているが、その豊富な水量と清澄な水は河口一帯にパルプ、レーヨン工業を発達させている。

八代臨海工業地帯の工場に供給するため給水能力四七五、〇〇〇m³／日の工業用水道は昭和三十九年度から実施設計を行う予定である。

（表1）河川の水利現況　（単位m³/S）

河川名	平水量	渇水量	水利権 農業	水利権 工業	水利権 計	取水可能量
菊池川	34.50	16.30	8.74	2.11	9.94	6.46
加勢川	26.40	17.15	12.12	0	12.12	6.71
緑川	22.85	10.05	9.33	0.42	9.75	0
球磨川	70.80	35.00	13.92	2.79	16.71	18.29
白川	19.43	6.17	3.68	0	3.68	0

（注）渇水量は灌漑期

（表2）工業用水道建設計画

事業名	取水河川名	給水能力（m³/日）	事業費（百万円）	建設年次	給水単価（円）
有明工業用水道	菊池川	345,000	1,442	昭35～45	3.00
八代工業用水道	球磨川	475,000	1,895	昭39～45	第一期3.50 第二期2.50

■加勢川　熊本市画図湖に源を発し、木山川と合流下流で緑川とさらに合流し有明海に注ぐ。

画図湖は自然湧水地帯で年間コンスタントに七m³／秒の湧水があると云われ、干ばつ時においても流量の著るしい減少はない。湧水の源は阿蘇カルデラ盆地で滞水したのが伏流して地下をくぐり熊本で湧出したという説が強い。

■菊池川　阿蘇山系に源を発し、岩野川、内田川、迫間川等を集め菊池川となり有明海に注ぐ。

県北部における最大の河川として鹿本、菊池の平野を潤し、灌漑としての利用が高いが、大牟田市近郊に工業用水がないため、玉名市から水路約三十キロメートルをひき大牟田工業地帯へ供給されている。有明臨海工業地帯へ供給するため、給水能力三四五、〇〇〇m³／日、事業費一、四四二百万円の工業用水道が計画されている。

電力

九州では火主水従の構成を示しているが、水力電源地帯が南部に偏在している反面、電用産業が産炭地域に近い北部に集中しているため火力の建設が活潑に行なわれた。このことが九州の電気料金を高くしている要因の一つとなっているが、今後低コスト発電所の開発と全国的に火力の比重が増大するにつれて料金格差は漸次縮まるものと考えられる。

九州の電力運営は、火力発電で年間調節を行ない夏期豊水期は水力と新鋭火力をベースとし冬季の渇水期は火力をベースとしているので、需給状況は他地区に比べ安定しており、すでに昭和三十四年度より均衡を保持し、電力の広域運営が開始されて以来、九州は年々融通送電してきたが昭和三十六年は二億六千七百万キロワットの実績であった。

熊本県の電力は本来豊富、低廉であったため、新日本窒素肥料（株）水俣、東海電極（株）田の浦、日本合成化学（株）熊本の電力消費型工場が立地されたが、電力再編成以来料金のメリットは薄れたものの、質量においてはなお優秀である。県内水力発電所数は県営三、電発一、九州電力二十七、会社（自家発）十七となっており最大出力1,076×10⁶KWHである。

電力需給バランス　（単位：10⁶KWH）

項目＼年度	37	38	39	40	41
需用電力量	10,232	10,948	12,704	13,944	15,280
供給可能電力量	11,453	12,241	14,100	15,401	15,932
供給予備率（%）	3.0	10.1	10.9	10.2	1.0

■共同火力発電

産炭地振興事業として石炭専焼による火力発電構想が進められている。

三井鉱山三池鉱業所では石炭合理化事業として、昭和四十三年における出炭増加量二百万トンを消化する